Osaka Shoin Women's University Repository
The Human Science Research Bulletin
2007, No. 6, 25-33

「臨床心理学の方法論における「勘」の意義と機能」

―― 内田康夫氏の作品を臨床の現実と見立てながら ――

心理学科　上野　矗

要約：本論は，前の「「勘」の臨床心理学的方法論的意義」をもとに，内田康夫氏の作品を臨床の現実と見立て，そこで「勘」がもつ臨床心理学の方法論上の意義と機能に関する検討を加えた。その結果，次のような知見が引き出されてきた。

1. 人への援助的理解にアプローチするに当って，「勘」は必要かつ重要な認識の仕様であること
2. 「勘」は，認識・判断（推理）・行為を含む四次元からなること
3. とりわけ，「勘」は人のみえない世界をみえる世界に転換する機能をもつこと

「勘」には臨床心理学的方法論上もっと他の重要な機能が推察され，なお検討を継続していきたい。

キーワード：「勘」「勘」の四次元　みえない世界からみえる世界へ

問題およびその設定の理由

前に，「「勘」の臨床心理学の方法論的意義－涙に関する臨床心理学的研究（1）及び（2）をもとに[1)]」の検討と報告を行なった。臨床心理学が人間の人間による人間のための援助的理解をはかろうとするとき，「勘」は，その生活や人生の流れとそこに起る生活諸事象の意味発見に迫る必要かつ重要で有意義な認識方法であると考えた。

ところで，心理臨床領域で客観と主観また cure と care を対置させる二分思考法をひとつに融合・統合させる融合・統合的思考法（現象学的方法）を背景に，新しい癒しの展望をはかる動きが出てきた。それは，1960 年から 1970 年代にかけて，社会学あるいは社会心理学で現象学的方法を背景にして，人間の主体性を復活させようの動向である。

かねてより，心理学がそうであったように社会学もまた科学の成立に向けて，これまで自然科学的方法を適用してきた。その結果，人間と組織（社会）との関係は，「組織それ自体の問題として客観的に取上げられてきた[2 i)]。」そこでは「組織は人間の外側にある所与の実在として前提されている[2 ii)]。」そのため人間と組織（社会）はとかく対置され，「組織に対する管理的志向と疎外論的志向に流れてきた（組織のなかの人間）[2 iii)]。」

しかしながら，「われわれ一人ひとりがその様々な生活場面でこの現代社会を具体性と実感をもって生きるとき，そこでわれわれが自ら遭遇する体験される組織に直に触れていく臨床的方法の自覚が要請される[2 iv)]。」それは個人が具体的に実感し，意味として体験される組織で，いわば「人間のなかの組織[2 v)]」である。

確かに，「組織はある集団的な目的を達成するため，集団成員の地位・役割に基づく行動の機能的システムであるとき，人間を地位・役割といった機能に還元し，組織のなかの人間としてしまう[2 vi)]。」しかし，「われわれにとって組織はどこまでも自分にとって意味的に体験されている世界なのである。それこそ社会的世界であり，共同世界であり，人間のなかの組織なのである[2 vii)]。」

このように「組織が客体的構造としてあり，組

Osaka Shoin Women's University Repository

織の前に佇む人間（組織のなかの人間[2viii]）」と「組織が主体関係にあって，組織は人間の背後に広がっている（人間のなかの組織[2ix]）」とがある。このとき，「組織のなかの人間」と「人間のなかの組織」とを二分化せず，両者を人間の人格のうちにひとつに融合・統合する人間としてのあり方が要請される。足立の臨床的方法によると，「組織のなかの人間の位相が固定しつつある状況を人間のなかの組織へと絶間なく位相転換をはかるところに組織の人間化はある[2x]」というのである。

また1960年から70年代にかけて，社会学あるいは社会心理学で現象学的方法を背景に現われたもうひとつの動向がシンボリック相互作用論（Symbolic Interaction Theory）である。

シンボリック相互作用論は，行為者の立場に立って，その内側に入り込み，意味・解釈過程の内的世界に迫ろうとする。その際，意味・解釈過程はその人の主体である自我と深くかかわる。主体としての自我は志向によってものごとに立向かい，働らきかけ，自己のなかに取り込み，自らの一定の意味づけを行い，解釈し，その現実を構成してくるのである[3]（この提言は社会構成主義の主張とつながっていく）。

しかも，シンボリック相互作用論は，言語を思考の前提条件とおき，社会的相互行為の一形式とみ，その過程に注目しようとする。その際，言語学から出てきた構造主義に次いで，語用論的転向が起り，言語が相互行為的現象と捉らえられ，言語の実際の使用とその文脈が関心の焦点となった[4]。

社会学あるいは社会心理学にみられるこうした動向は臨床心理学に接近し，社会学的視座を開らいてくることになる。山本の指摘の通り，「人生はエピソードの連続体である。……中略……人生ドラマは社会的状況を背景に生活環境システムという舞台のなかで進行していく[5]」。

このような背景から，「ここに臨床領域における社会構成主義の展開としての語り・物語りに注目，ナラティブセラピーというかたちで結実してきた[6]。」

こうした経過をふまえ，ここで内田康夫氏とその作品をナラティブの臨床的現実のモデルと注目し，主題：心理臨床における「勘」の意味・意義およびその機能に検討を加えようとするのである。

さて，前後するが，筆者はかねてより内田康夫氏のミステリー小説に関心をもち，読破してきた。ここでは氏とその作品を人間とその生活諸事象の臨床的現実と置いてみることとした。フィクションではあるが，氏とその作品は，われわれの日々の生活の営みに密着して，人間とその生活事象にかかわる諸経験の連接過程（文脈）のリアルな展開をあますところなく語り伝えている。

氏とその作品は，思うに，人間原理という正と人為的原理という反とがせめぎ合う生き様の現実を描いている。これをその人の生活上また人生上の文脈の流れに位置づけ，意味づけ，解き，そこから正と反との融合・統合として開らける人間の原風景への回帰をはかる。そして究極的に人間的な癒しを探求していく。その際，これに深く強く関与し，必要かつ重要な認識方法として「勘」に注目している。

内田康夫氏とその作品は，このように主題：心理臨床における「勘」の意味・意義およびその機能にかかわって，魅力があり，示唆される宝玉がちりばまかれており，検討することをひきつけるのである。

生活や人生の現実を成り立たせる枠組み

筆者はわれわれの生活の営みの枠組みを空間（ここを），時間（いま），関係（ともに），そして恩恵（おかげで）にみてきた[7]。社会構成主義の経過および内田康夫氏とその作品を通じて，この枠組みを構成する4要因に主体である人を加えることによって，相互に有機的な連環が成立する。

Osaka Shoin Women's University Repository

そしてこれが現実により近い真実であると考えた。すなわち，生活や人生の現実を成り立たせる枠組みは，主体である人とその空間と時間との関係の仕様によって構成されてくるということである。

具体的に記そう。まず人は直面する自分，他者，また客観的生活諸事象に眼を指し向け，かかわる。そして，これを受けとめ，意味づけ，位置づけ（経験），独自で固有な内面的意味体験世界としての生活の現実を構成し，構築してくる。また人は構成・構築した生活の現実をその生活や人生という生の流れという文脈に位置づけ，そこから生の流れを再構成・再構築してくる。この文脈にそって，人は発達・成長し，積み上げてきたその人の歴史を基に将来展望を開らき，生きてくるのである。

その際，やがて人は生活や人生の生地がほの暗らさ，あいまいさ，不確実さ，未知性を含み，しかも一回限りであるとの自覚をうるに違いない。そして往き着くところが病いであり，老いであり，最終的には死という必然（宿命）[8] の帰着どころなのである。この自覚は生活や人生の根底に不安といった不条理な状況が底流していることを知らしめることになる。

加えて，人間が知情意の存在ゆえ，知の合理性・論理性・条理性と同時に，情意の非合理性・非論理性・不条理性が生活や人生にあまねく滲透してくる。われわれが知の力によって発展させてきた科学・技術は，情意の不条理への克服の道であった。それは人がその安定と安心のために傾く傾向性も加わって，知の力に偏重してきた道でもあった。だが，この道は果てしない相克の斗いの意味のようにもみえる。

上のこれらは，ときに人が生活や人生をその根底から揺るがし，遭遇する生活諸事象の意味や人生の真実から眼をそむけ，みえなくする。また生活の現実でみえることをみえなくしてしまう。あわせて，人は，自己を守るための心のからくりを働らかせてもくる。加えて主体が違うゆえに，人は孤立，内閉し，他者の内面的意味体験に触れ，わかり，わかち合って共有し合う世界を構成・構築していくことを至難なことにしてしまう。

いいかえれば，人の生き方とそこから構築される生き様や生活の現実は独自で固有でかつ多様である。その際，他者や生活諸事象または社会状況等に影響を受けながら，この生き様は時系列的に積み重ねられ変容・変質して一層複錯化してくる。端的にいえば，人の生活や人生は，合理的・論理的かつ条理的な公式にはまらず，飛躍した不条理な文脈の展開をみせてくるのである。

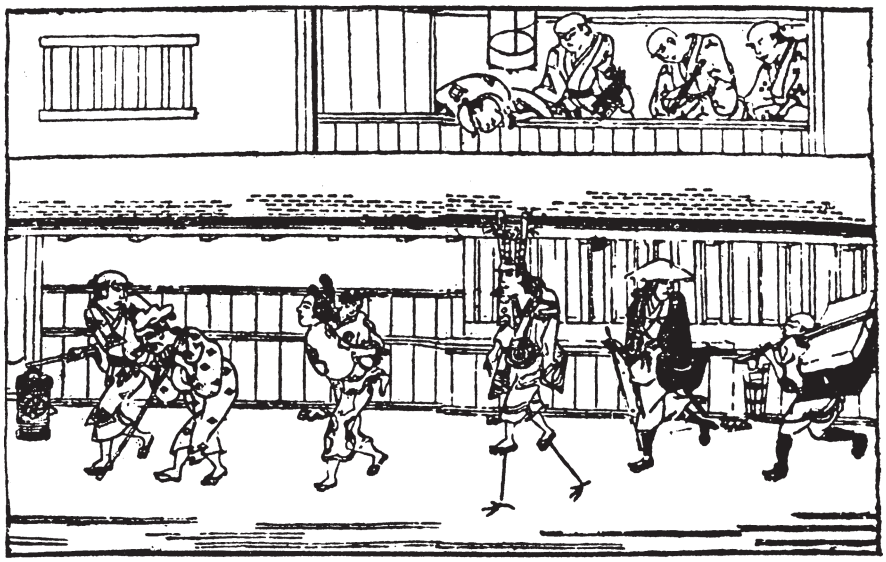
この文脈の認識の仕様は，知る説明というよりも，わかる了解というところにある。その場合，文献 8 の山本俊一および内田康夫作品を通じて，原因による結果という因果の説明類似の文脈（心理臨床でいえば査定に基づく心理的援助・治療に当る）；また了解と了解の連接による必然の文脈；そして予期しない偶然（で必然）の文脈；最後に人為を超えた運命ともいうべき因縁の文脈；これら文脈が流れて交錯しているのが実際である。そして，人がこのようにして織り成す生活や人生はその人の独自で固有な綾をかもし出すことになる。

人間の生活や人生の現実に迫る「勘」の必要性と重要性

われわれ人間の生活や人生の現実を成り立たせる枠組みに関する上の検討から，人間とその生活諸事象の経験が織り成す生活や人生には絶えず条理・不条理に代表される相反し合う両義性といった特徴が担われていることが知られる。心理臨床のなかでも同じく，内田康夫氏とその作品のなかでも，科学捜査を行う警察による役割関係に基づく客観的実証的アプローチと浅見光彦氏に代表される私立探偵の対人・対話関係に基づく間主観的で相手中心のアプローチという両アプローチが提示される。

その際，両アプローチをとかく“あれかこれか”との二分思考法から二分化し，人は通常科学的で

Osaka Shoin Women's University Repository



伏見の里に住む盲人――
通りすがりの人の足音を聞いて、年齢・職業・風體・心理までを言ひ當てる
特殊な勘の持主。　（西鶴の「大下馬」より「足音の音感」七六頁）

図１　勘の一様相（竹内芳衛：1942，第六感，畝傍書房より）

客観的条理に適うアプローチを正しいものと選択してくる。その結果，心理臨床の実際でもそうであるように，目の前のはっきりとみえる事実・事象を集め，分析する科学的客観的アプローチ（警察による捜査）が断然優位を占めてることになる。従って当然，浅見氏の探偵捜査は「勘」を軸とする主観的アプローチとみなされ，とかく等閑視され軽蔑されがちとなる。

科学・技術の革新的進歩や信奉への危惧や疑義から，今日，一方で人間重視が指摘されながら，「勘」によるアプローチを主観的ゆえに蔑視するいき方はアイロニーであるといわねばるまい。

内田氏とその作品，また臨床心理学における社会的視点への動向にもみられるように，“あれもこれも”との融合・統合思考法は，両アプローチを捜査者や臨床家というひとりの人格のうちにひとつに融合・統合し，生活諸事象の経験が織り成す人の生活や人生の真実なる世界を開示してくる。

実際，事件捜査で重要なのは，「客観的で緻密なデーター収集[9 i)]」と同時に，人の生活や人生の文脈をふまえ，「小さな取るに足りないことから，そこに隠されている事実や意味を察知する[9 ii)]」捜査官の「「勘」や直観，それこそ第六感[10)]」ともいうべき「閃の存在，思考の飛躍や意外性が必要かつ重要である[11 i),12)]。」捜査はする人間の行為だからである。

くり返すが，「捜査員は人間である。その人たちが集めてきた証拠品をコンピューターにかけても，飛躍的な推理が生まれることはありえない。……中略……そこで必要なのは人間の着想の閃き（「勘」）だと思われる[13)]。」いってみれば，「科学的な眼で話だけ聞いてみると，物の形だけはわかるが，色がみえない，味がわからない，それに匂いがちっとも感じられないことになる[14)]」からである。

内田氏とその作品が指摘のこうした事情は，いみじくも臨床心理学を含む心理学が両アプローチを方法論上対置させる問題状況ときわめてよく酷似している。と同時に両アプローチの対置関係を克服していく道標を指し示してもいる。そして，

Osaka Shoin Women's University Repository

これに深くかつ強く関与し，寄与してくる「勘」という認識方法に注目する。「勘」が生きる人間像への援助的理解に迫る必要かつ重要な認識方法とみたからである。そこで，当然のことながら，この「「勘」や第六感の素質を涵養することが基本となる[15]」。

内田氏とその作品にみられるこうした指摘は，心理臨床の実際にかかわってきわめて示唆的である。

生活の現実における“みえない世界”に迫る「勘」

われわれは生活の現実で，「たとえば「近づく」「遠ざかる」に代表される物理的で事柄的で外見可能な「みえる世界」にいつも生きている。と同時に，「近しさ」「疎遠さ」に象徴される気持的で体験的で内面的な意味世界，つまり“みえない世界”においてもいつも生きている。そして両世界が生活の現実ではひとつに融合・統合している[16 i]。

そこで，「女性がある男性と「近しく」なろうと「近づいて」も，直ちに「近しい」とはいえない。「遠ざかって」いても，「疎遠」どころか「近しい」ことだってある。「近さ」「遠さ」はたとえばデートの回数によって“みえる世界”の指標でいつもはっきりと測定できる。しかし「近しさ」「疎遠さ」は“みえない世界”の属性である意味（愛）の発見によって決める以外ない[16 ii]。“みえない世界”の属性である意味は「勘」の閃きによってはっきりとみえてくるのである。

内田康夫氏とその作品は，既述の通り，みえないことやものをみることができ，その真相を見抜くのが「勘」だと位置づけ重要視している。そこで氏とその作品のなかから，「勘」に関する記述を少しく紹介していこう。

くりかえすが，警察の捜査は目の前のはっきりみえる事象を分析することの積み重ねで進めようとする。岡部警部（浅見探偵）の捜査はごく小さな取るに足らないことから隠されている事実を察知する能力に秀れている。科学というがやはり人間の叡知がものをいう[9 i]。

こうしてみると，人間が後天的に開発される精神活動が思考だとすると，「勘」は先天的に持って生まれたもの[17]である。いいかえれば，「勘」は人なら誰でも本能的に持ち合わせているともいえよう。

その際，人がこのことを自覚しているか否かが重要となろう。そして持ち合わせた「勘」を生かしていくのは，人間とその生活諸事象の経験の意味を解き明かし，その生活や人生の真相を理解し，援助的理解をはかろうとする目的意識が必要となる。

こうした目的意識にそって，その人自身と生活諸事象またそれを取囲む他者や状況に関する客観的な知識や情報を初め，その人やかかわりある他者との対人・対話的かかわり合いを通じて，その人の生活や人生の文脈をふまえた知識や情報の収集が必要ともなろう。

そこから，小さな取るに足りないことが，実はそこに隠されている重要な事実や意味を察知する「勘」が働くことになる。この作業のくり返しこそが「勘」の涵養をはかる意味ともなろう。

こうしてみると，「勘」には，認識とそれに基づく推理・判断が作用している。「収集された資料から仮定されたことと現実的な可能性との組合せから生まれた着想こそ「勘」[18]」なのである。「何の目的意識もないことからは「勘」は生まれない[18]。」

ここで重要なのは，「勘」を生み出すに当って，えた「着想や理論的展開に意外性や飛躍が要るということである。それは着想の閃き[13]」だともいえよう。浅見氏の場合，「むしろ論理よりも何よりも自己のイメージの世界でその臨場の瞬間をみつめている[19]。」「このとき胸がざわめくような気配が生まれる。そこからすべて闇のなかだった事件ストリィーの先に曙光が射す。この場合不安

Osaka Shoin Women's University Repository

にも似た心理の揺れを感ずる[20]」という。

このようにして，「勘」から，「犯人が“自殺したように見せ掛けて殺した”と警察に思わせるねらいがみえ，わかり，“ように見せ掛けて自殺したという真実がみえてくる[11ii),21]」のである。

なお，この「勘」が時間展望のもと将来に指し向けられるとき，未知である将来への先見や予見へと拡がっていくことは必然でもあった。それは「戸隠伝説殺人事件[22]」の天道タキ「明日香の皇子[23]」の村久の姉春日，「ユタが愛した探偵[24]」の式香桜里，「はちまん[25]」の美由紀とその祖母香代子等にみることができる。

考察

以上，生活の現実における“みえない世界”に迫る「勘」に関して，物語という臨床現実の一つのモデルとして内田康夫氏とその作品を取上げ，検討してきた。

生活の現実における“みえない世界”に迫り，みえることにかかわって，そこでは改めて「勘」とは何かといったテーマが底流している。ここで前に検討した「勘」に関する筆者の所見[1]にそって少しく考察を加える。

1.「勘」の必要性と重要性：「勘」は生活の現実を生きる人の認識の一仕様である。「勘」は人の内的・主観的な認識である。外的・客観的な認識とは違って，外見可能でなく，一般化できないため，科学的認識の仕様として「勘」は等閑視・蔑視されていることはまぎれもない事実である。

しかし，生活の只中を生きる人間の問題に迫る心理学を初め諸科学における方法論に関する再吟味・再検討がなされてきている。

その際，生活の営みの舞台は主体としての人が志向性によって構成する生活の現実である。このことに注目してきた。この生活の現実は主観的である。しかし，人と人との対人・対話関係的かかわり合いを通じて，この生活の現実は相互にわかり合い，わかち合い，共有しうる間主観性の共同世界へつくり上げられてくる。

この生活の現実を生きる人にアプローチする際，「勘」といった主観的認識の必要性と重要性の認識はきわめて貴重である。内田氏とその作品がなされる同様の指摘に，筆者が共感し同意する所以でもある。

2.「勘」の方法論的布置関係：ただここで明確にしておかねばならないことがある。それはここで客観的方法と主観的方法とを二分思考法によって対置させ，一方を選択，他方を排除するのではないということである。両方法を人格のうちにひとつに融合・統合する融合・統合思考法というあり方が問われてくる。というのも，「勘」が生まれてくるについては客観的な認識からうる“みえる世界”の情報・資料の集積が必要かつ重要だからである。

いま，人間とその生活の現実に迫る方法論上の布置関係を描くなら図に例示する通りである。(図2参照)

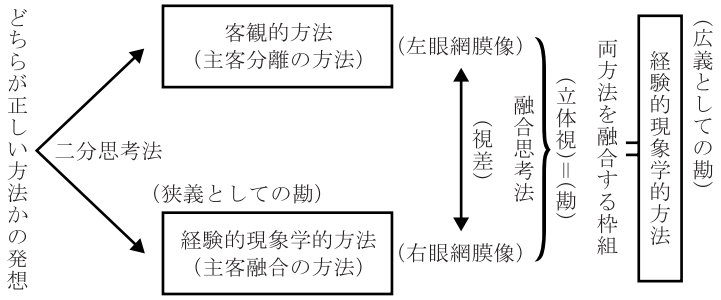


図2　客観的方法と経験的現象学的方法における「勘」の位置関係

Osaka Shoin Women's University Repository

人間とその生活の現実に迫ろうとするとき，事実に迫る客観的認識に依拠する自然科学的方法と体験に迫る主観的認識に依拠する人間科学的方法が同時に必要かつ重要となる。その枠組みをなし，両方法の方法論上の布置関係を開らくのが，相反し合う両方法を人格のうちにひとつに融合・統合する融合・統合思考法，すなわち主観的認識の「勘」が要として浮び上がってくるのである。このことは「勘」が現象学的方法に由来してくることを示している。この意味で，「「勘」の解明視点は現象学的方法にあるとみる[26 i)]」との黒田正典の指摘は正鵠をえたものだともいえよう。

3.「勘」の成立要因：内田氏とその作品で，「「勘」が先天的に持って生まれたもの[17)]」だというとき，それは人それなりにそなえられてきたものだということができる。「勘」を生むセンサーに当る共感や感受性（別論にて論考）をみると，「勘」が生来的という意味がよく了解されてくる。ここで生来的な感性に相応して，「勘」の涵養が問われてこよう。

また，内田氏とその作品で，「勘」の成立には「目的意識が必要である[18)]」。「このとき，胸がざわめくような気配が生まれる……後略[20)]」といった具合いに心理的プロセスを経てきていることを記載している。このことは黒田亮が指摘する通り，「「勘」の成立にプロセスがあり，それは神明的なものへの進展がある[27 i)]」というのと同質のものとみられる（別論にて論考）。

4.「勘」とは何か・その内実：さて，筆者の前の「勘」に関する検討[1)]で，黒田亮は，「「勘」を覚とし，心的立体視（psychical stereoscopy）にみている[27 ii)]。」また黒田正典は，「ゲシェタルト化された経験の総体の重心にみている[26 ii)]。」さらに竹内芳衛は「「勘」を第六感とみ，そのメカニズムを間脳（勘脳）におき，運動機能と情緒整調機能とを綜括する機能とみなしている[28)]。」加えて，内田氏とその作品は「「勘」を収集された資料から仮定されたことと現実的な可能性との組合せから生まれた着想である[18)]」と記載している。そして筆者は相反し合う経験の融合・統合点にみている。

それぞれに記載の仕様に違いがみられるが，共通しているのは，内田氏とその作品の表現を借りると，「意外性や飛躍があり，着想の閃きである[13)]」ということである。

また「勘」に関する諸記載から共通しているのは，「勘」が平面的な二次元の事象ではなく，立体的な三次元のそれである。しかも，いづれもバランスをはかる重心，相反し合う両極の融合・統合点，収集された資料から仮定されたことと現実的な可能性との適合点ということを指し示している。

人の心身の健やかさがホメオスターシスにあることをみると，「勘」が冴えることは癒しと健やかさにつながる道程を思わせる。

5. 動きを伴う四次元としての「勘」−「勘」の冴え：このようにみてくると，「勘」は，人間とその生活の現実の認識の一仕様であるが同時に，行為と連結する判断とも密着して連動してくることが知られる。この意味で，「勘」は動きを伴う四次元にあるということができよう。

えられた客観的情報資料や主観的情報資料を集積し，両者を人格のうちにひとつに融合・統合する場合，われわれはとかく理性的で合理的論理の筋，常識的で良識的論理や枠組みの筋，そして一般的理解の筋，これら筋にそった良悪善悪の筋に照合できると正しいと判断されがちである。

しかし，「人間には上のような条理だけではない他の行動（認識・判断）原理[29)]」－人の不条理な行動原理がある。この不条理な行動原理に迫るには，えられた客観的及び主観的な情報資料の集積をふまえ，これをその人と生活の現実の流れに配置して，これがその人にとってもつ真相・真実（意味）に迫る「勘」，いいかえるとその人とともに動く四次元の「勘」が必要かつ重要となる。

ここには，「赤子のようなのびやかで自由な宇

Osaka Shoin Women's University Repository

宙，豊かな空想力の飛翔[30]」がある。それは「自由自在にする[31]」ことの意味でもあろう。こうした人間的な生地への回帰は上述の種々の筋から真実を解明する力に活用していける。この意味で人間的な生地への回帰は上述の種々の筋を越えることにもなるのである。

このとき「勘」の冴えが初めて，人間とその生活の現実における“みえない世界”を“みえてくる”ようにするのである。「勘」がそれ自体として活かされてくる。

上記の種々の筋ゆえに“みえなかった世界”が，これから解放されて初めて“みえてくる世界”と出会える。

自己防衛機制ゆえ無意識にあって“みえなかった世界”が意識化されて“みえてくる”。

心理的錯覚ゆえ，“みえない世界”が，これを見定めることによって“みえてくる”。

偽装する智恵ゆえ，“みえない世界”が，これを見破ることによって，“みえてくる”。

定めた場所・位置ゆえ，“みえない世界”が，身の移動によって，“みえてくる”。

これらを可能にするのは人のまさに動きを伴う四次元としての「勘」なのである。

このようにみてくると，人相互にとって，自他の援助的理解を深め，高め，健やかな生活や人生の営みを積上げていくうえで，「勘」が状況への適なる認識，これに基づいた適確なる判断，そしてそこから適切なる行為に陽になり陰になって関与していることは明らかである。

そして「勘」が産み出される基盤がのびやかで自由自在である人間的生地への回帰にみるとき，至難な課題に逢着する。人間の発達や成長には既述の種々の筋の修得と活用が避けられない。このことは同時に人間的な生地が抑制，阻害されることになる。こうした相反し合う両側面を人格のうちにひとつに融合・統合するとき，まさに「勘」がここに再度再構成されてこよう。

臨床心理学が目指す人間としての健やかさ，心理臨床実践における人相互の援助的理解を実現する目安拠がこの辺に本質があるような思いがするのである。

文　　献

1) 上野矗：2006,「勘」の臨床心理学の方法論的意義－涙に関する臨床心理学的研究 (1) 及び (2) をもとに－，大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要，第 5 号，pp. 25～33.

2) 足立叡：1971，現代人と組織，早坂泰次郎編：20 世紀人の心理学，朝倉書店，ⅰ）p. 159; ⅱ）p. 162; ⅲ）p. 162; ⅳ）pp. 157－159; ⅴ）p. 159; ⅵ）p. 164; ⅶ）p. 165; ⅷ）p. 166; ⅸ）p. 167; ⅹ）p. 167.

3) 船津衛：1976：シンボリック相互作用論，恒星社厚生閣，pp. 19－30.

4) 中河伸俊：2001，Is Constructionism Here to Stay? 中河伸俊，北澤毅，土井隆義編：社会構築主義のスペクトラム　パースペクティブの現在と可能性，ナカニシヤ出版，p. 7.

5) 山本和郎：1991，臨床心理学と社会学・社会心理学的視点，臨床心理学体系 ① 臨床心理学の科学的基礎，金子書房，p. 212.

6) 野口祐二：2001，臨床的現実と社会的現実，中河伸俊，北澤毅，土井隆義編：社会構築主義のスペクトラム　パースペクティブの現在と可能性，ナカニシヤ出版，p. 59.

7) 上野矗：2006，病床の臨床心理学－病気像と病気との和解，フィリア，pp. 42～48.

8) 山本俊一：2004，死生学の基本問題－死生学の方法論－死の医学的研究－第 1 節偶然と必然に関する草稿，pp. 1～2.

9) 内田康夫：1995，シーラカンス殺人事件，徳間文庫，ⅰ）p. 283; ⅱ）p. 282.

10) 内田康夫：1993,「横山大観」殺人事件，徳間文庫，p. 12.

11) 内田康夫：1989，小樽殺人事件，光文社文庫，ⅰ）p. 213; ⅱ）pp. 267～268.

12) 内田康夫：1987，佐渡伝説殺人事件，角川文庫，p. 168.

13) 内田康夫：1989，白鳥殺人事件，光文社文庫，p. 79.

14) 内田康夫：1984，多摩湖畔殺人事件，光文社文庫，p. 214.

15) 内田康夫：1987，夏泊殺人岬，徳間文庫 p. 134.

Osaka Shoin Women's University Repository

16） 荒井洋一：1982，私はどこからきたのか，私はどこへ行くのか，東京学芸大学哲学研究室編：自我，大明堂，ⅰ）pp. 37～41；ⅱ）pp. 44～45.
17） 内田康夫：1991，佐用姫伝説殺人事件，角川文庫，p. 97.
18） 内田康夫：1999，蜃気楼，講談社文庫，p. 148.
19） 内田康夫：1989，琥珀の道殺人事件，角川文庫，p. 196.
20） 内田康夫：2003，贄門島（下），文藝春秋社，p. 37.
21） 内田康夫：1988，津和野殺人事件，光文社文庫，pp. 256～263.
22） 内田康夫：1985，戸隠伝説殺人事件，角川文庫。
23） 内田康夫：2003，明日香の皇子，講談社文庫。
24） 内田康夫：2005，ユタが愛した探偵，角川文庫。
25） 内田康夫：1999，はちまん（上），（下），角川書店。
26） 黒田正典：1963，心の眼，協同出版，ⅰ）p. 54. ⅱ）p. 64.
27） 黒田　亮：1933，勘の研究，岩波書店，ⅰ）pp. 285～287. ⅱ）p. 94.
28） 竹内芳衛：1942，第六感，畝傍書房，pp. 350～355.
29） 内田康夫：1986，赤い雲伝説殺人事件，角川文庫，p. 309.
30） 内田康夫：1999，怪談の道，角川文庫，p. 254.
31） 関　計夫：1965，感受性訓練，誠信書房，p. 24.

Clinical psychological Study on「the Kan」

—— Looking on the mystery novels by Yasuo Uchida as the realities of practice of clinical psychological work ——

Osaka Shoin Women's University
Hitoshi UENO

Summary

Based on the privious study: An empirical phenomenological investigation into「the Kan」, this paper reports on a methodological investigation into「the Kan」in clinical psychology, especially it's significance and function, through the mystery novels by Yasuo Uchida as the realities of the practice of clinical psychologcal work.

Results are as follows.

1. In order to actualize to the true helping relationships to the client,「the Kan」seems to be very important and necessary way of understanding the client and of constructing the true helping relationships.

2. A four-demension seems to constitute「the Kan」, in other words, a four-dimension means that adds the move to the psychical stereoscopy by Ryo kuroda. Concretely, understanding, interpretation or judgement, and action are「the Kan」's components.

3. Especially「the Kan」has the function that change one's unvisible world to his visible one.

This continuous study has to be carried out, because「the Kan」seems to have another function.

Keywords:「the Kan」,「the Kan」as a four-dimension, from unvisible world to visible one.